
花束

天窪 雪路

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花束

【Nコード】

N8669P

【作者名】

天窪 雪路

【あらすじ】

「付き合う前に恋の結末が分かるのなら、誰も遠回りをしなくて済むのにね」

「付き合う前に恋の結末が分かるのなら、誰も遠回りをしなくて済むのにね」

4年付き合った彼と別れてしまったという友人がそう愚痴をこぼした。彼女を慰める気の効いた言葉が浮かばなかったから、僕は彼女がそれ以上傷つかないようにと当たり障りのない相槌を打った。

その帰り道、友人の言った言葉が急に思い出された。快速電車はそもそもそこに存在しているのかどうかも怪しそうな小さな駅を飛ばしながら、夜の街の姿を洗いざらい右から左へと飛ばしていく。僕はそんな景色をぼんやりと眺めながら、彼女の残した言葉について思いを巡らせた。

「付き合う前に恋の結末が分かるのなら、誰も遠回りをしなくて済むのにね」

家に着き、ドアを開ける。

「ただいま」

「おかえり」

僕にはそういう関係の恋人がいた。

「うわぁ、寒い。本当に凍えちゃうよ」

玄関に駆け込んだ僕は、そのまま慌ただしくコートを脱ぎ捨て、潜

るようにしてこたつに入った。

「ちょっと、だらしないわよ？小さな子どもじゃないんだから」

そういう風に言われることにもずいぶん慣れてしまっている。僕は恋人のキミに甘え過ぎなのかも知れない。三つ年上の恋人のキミになめられないように、出会った頃には亭主関白を気取ったものだけど、付き合ってから4年も経てば素が出てくるというもの。僕はキミのことが大好きだった。いつまでも守りたいと思っていた。そしてそれはずいぶんと真剣な気持ちになっていたし、そして僕は本当にキミを必要としていた。

「ねえ。あなたはショートケーキの上に乗ったイチゴを初めに食べる？それとも最後までとっておく？」

「ああ、それなら僕は最後までとっておくタイプだなあ。楽しみは終わりまでとっておきたい」

そんな他愛もない会話だって、いつもキミのリードで弾んだ。キミがいなければ僕はまるで抜け殻だ。

キミと出会い、もう4年という歳月が経った。僕の仕事はその頃になつてようやく軌道に乗り、それまでのようにキミのアルバイト代を当てにしなくても何とかキミを養っていくことができそうだと自信を持てるくらいにはなっていた。間もなくやってくる4回目の記念日に、僕はキミにプロポーズをしようと決めていた。

何度も前を横切ったことのある花屋。いよいよ僕は意を決して中へ入って行った。

「恋人にプロポーズをするんです。とびきりの花束をつくってくださいませんか？」

花屋の店員の女性はとてもいい人で、まるで僕の親しい友だちでもあるように親身になって僕の相談に乗ってくれた。

「あなたの恋人は何色が好き？普段着ている服はどんな系統かしら？几帳面な彼女さんかしら？好奇心は強い？優しい人なのね」

お店の人は僕の口から出た恋人のキミに関する情報をメモにしまとめると、僕にそのメモを手渡し、こう言った。

「とびきりの花束はあなたが作るのが一番よ。だって、こんなに彼女さんのことを知っているんだもの。お店の花から自由に選んで大丈夫よ。もちろん、ちゃんとお会計はするけれどね」

僕はそのようにして2時間をかけて完成させたとびきりの花束を文字通り両手に抱えるようにして家路へと急いだ。彼女の驚く表情が目に見えようだった。

「ただいま」

インターホンを鳴らしてもキミは出てこないから、僕は仕方なく花束を抱えたまま、器用に鍵を開けて家に入った。

キミはまだ帰ってきていなかった。僕は花束をダイニングテーブルの上に置き、キミが帰って来るのを待つことにした。

そう長い時間を待たずに、僕にはキミに何かがあったんだと分かった。

予感は的中していた。

携帯電話を見ると、キミと僕との共通の知人やキミの妹から何件もの着信とメールの履歴が残っていた。皮肉にも、ちょうど僕が夢中になって花束をつくっていた頃の履歴だった。

「お姉ちゃんが交通事故に遭いました。連絡を下さい。搬送先の病院は・・・」

病院に着くと唐突にこう言われた。

「見ないでいてあげて。その方がお姉ちゃんのためだと思う」

「伝えたいことがあったら私たちが伝えるわ。」

あなたがどうしてもというのなら止めはしないけれど、

あの子も自分の姿を見られたくないかも知れないわ」

僕はキミの実際の家族がどうしてもそんなことを言うのだろうと思った。けれど正直なところ、キミの姿を遠目に見て息をのんだよ。

分厚い包帯をぐるぐる巻きにされたキミ。表情はおろか、顔だって見えやしない。何だかよく分からない色々なチューブがキミにつながっていて、キミの容体が僕の想像していたものよりもずいぶん悪いことは一目見て分かった。

そういう時、泣いてはいけなさと頭では分かっていたけれど、込み上げてくる涙を、僕は止めることができなかった。

それから4日後に、キミは天国へと旅立った。

久しぶりに戻った自宅のダイニングテーブルには、行き場を失った豪華客船のような花束が残されていた。それを見て僕は再び泣いた。何度泣いたことだろう。一人の人間から、これほどの涙がよくも出るものだと思った。それほどに涙が溢れ出した。

僕は思う。4年間キミを待たせた挙句、結局キミに何もしてやれなかったと。稼ぎが悪くてもキミに思いを伝え、どうしてもあの時プロポーズをしなかったんだろうと。そうすればキミの人生も、そして僕の人生も変わっていたに違いない。ある小さな出来事をきっかけに人生のすべての歯車の噛み合わせがうまく具合に修正されたかも知れない。

僕は思う。

「付き合う前に恋の結末が分かるのなら、誰も遠回りをしなくて済むのにね」

いや、それでも。それでもキミを愛せて良かったと思う。きっとキミも同じ思いでいてくれたと思う。

そして僕の気持ちはいつまでも変わらないし、これからだって一瞬もキミを忘れたりはいしない。

まるで流行りの歌の歌詞みたいだけれど、キミに出会えて本当に良かったと思う。

僕はそれについてぼんやりと思い巡らせながら、
キミのいるはずの天を仰いだ。

夜空に浮かぶ星々の中で一番キレイな星が、僕に向かって微笑んだ。

そんな気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8669p/>

花束

2011年1月20日01時27分発行